総合

平成三十一年度　一般入学試験問題　国　語

享栄高等学校

一

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（解答はすべて解答用紙に記入しなさい。）

一人でも生きていける社会だからこそ『 I 』が難しい

「人は一人では生きていけない」

皆さんは先生やご両親から、よくこうした言葉を聞かされたことはありませんか。テレビドラマなどでもこんなセリフをよく耳にします。「たしかにそうだな、人間一人では生きていけないな」、とこの言葉に素直に納得する人もいるかもしれません。でも反対に「ホントにそうかな。なんかしっくりこないな。人はじつは一人でだって十分生きていけるんじゃないかな」と思う人だっているでしょう。

皆さんはどう思われるでしょうか。

この問いに関する答えの傾向としては、こんな予想が立てられます。年齢が上になればなるほど、そして暮らしている場所が地方であればあるほど、「人は一人では生きていられない」と答える可能性が A 。そして若い年代でしかも都会暮らしであればあるほど、「案外人間は一人で生きていけるのではないか」と答える割合が B のではないかと。もちろん都会暮らしの若者すべてが「一人でも生きていられる」と考えるわけではないでしょう。しかし全体的にはこうした傾向が見られるのではないかと思われます。

人と人との〈つながり〉の問題を考える最初の出発点として、人は本当に一人では生きられないのか、それとも、まあそれなりに生きていけるのかといった問いを立ててみましょう。

かつての日本には「ムラ社会」という言葉でよく表現されるような地域共同体が存在していました。①「ご近所の人の顔と名前はぜんぶわかる」といった集落がそれですね。これは、何も地方の農村や漁村だけに限ったことでなく、東京のような都会にだってあったのです。『ＡＬＷＡＹＳ 三丁目の夕日』――映画ですから描き方にはフィクションの要素も多分に入っているとはいえ――のように、近所に住む住人同士の関係が非常に C な「ご町内」が、昭和四〇年くらいまでの日本には確かにありました。

そんな「ムラ社会」が確固として存在した昔であれば、これは明らかに「一人では生きていけない」ということは厳然とした事実でした。

なにより、食料や衣類をはじめ、生活に必要な物資を調達するためにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかったからです。こうした、物理的に一人では生活できない時代は長く続きました。だから村の交際から締め出されてしまう「村八分」というペナルティは、わりと最近まで D 問題だったわけです。

ところが近代社会になってきて、貨幣（＝お金）というものが、より生活を媒介[a]する手段として浸透していくと、極端な話お金さえあれば、生きるために必要なサービスはだいたい享受できるようになりました。

とりわけ、今はコンビニなど二十四時間営業の店も増え、思い立った時にいつでも生活必需品は手に入れられるし、ネットショッピングと宅配を使えば、部屋から一歩も出ずにあらゆるサービスを受けることも可能になっています。働くにしても、仕事の種類によってはメールとファックスで全部済んでしまう場合だってあります。

このように、一人で生きていても昔のように困ることはありません。生き方としては、「誰とも付き合わず、一人で生きる」ことも選択可能なのです。②ある意味で、「人は一人では生きていけない」というこれまでの前提がもはや成立しない状況は現実には生じているといえるのです。

さて、こうした現代的状況を目の前にして私が言いたいのは、「だから、一人でも生きていけるんだよ」ということではありません。みんなバラバラに自分の欲望のおもむくままに勝手に生きていきましょうといったことでもありません。「一人でも生きていくことができてしまう社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」ということが言いたいのです。つながりの問題は、こうした観点から考え直したほうがよさそうです。

今の私たちは、お金さえあれば一人でも生きていける社会に生きています。

でも、普通の人間の直感として「そうは言っても、一人はさびしいな」③という感覚がありますね。本当に世捨て人のような生活が理想だという人もいないわけではありませんが、たいてい、仮にどんなに孤独癖の強い人でも、まったくの一人ぼっちではさびしいと感じるものです。

ではなぜ一人ではさびしいのでしょうか。やはり親しい人、心から安心できる人と交流していたい、誰かとつながりを保ちたい。そのことが、人間の幸せのひとつの大きな柱を作っているからです。だからほとんどの人が友だちがほしいし、家庭の幸せを求めているわけです。

あの人と付き合うと便利だとか便利じゃないとか、得だとか損だとかいった、そういった利得の側面で人がつながっている面もたしかにあるけれども、しかし人と人とのつながりはそれだけではないわけです。

だから、「人は一人でも生きていけるか」という問いに対する私の答えは、「現代社会において基本的に人間は経済的条件と身体的条件がそろえば、一人で生きていくことも不可能ではない。しかし、大丈夫、一人で生きていると思い込んでいても、人はどこかで必ず他の人々とのつながりを求めがちになるだろう」です。

『Ⅱ』が、昔とは違う

誰でも、「人と親しくなりたい」、「人と人とのつながりの中で幸せを感じたい」と願うものです。本質的に人間は、つながりを求めるものなのです。

しかし、現代は、それを求めることによってかえって傷ついたり、人を追い詰めたりするような状況に陥ることがあります。この本を手に取った皆さんだって、少なからずそんな経験をしたことはあるでしょう。

④どうしてそうなってしまうのでしょう。

一つには、「親しさを求める作法」が、いまだに「ムラ社会」の時代の伝統的な考え方を引きずっているからなのだと私は考えています。

じつはご年配の方はもちろん、意外なことに若い人の中にも、その「古い作法」を引きずっている人は結構多いのです。むしろ若い人のほうが、「古い作法」に強くジュンスイ[b]に従っている傾向があるかもしれません。

ある程度社会経験を重ねれば、［　E　］とかわせることも、若い人は真正面から受け止めてしまいがちです。中学、高校などの部活動における先輩－後輩の関係の作り方などをみていると、そう感じることがあります。一歳か二歳しか違わないのに、かなり厳しい上下の関係を守っている場合がありますね。だから辛いし、ときとして爆発してしまうこともあるのではないでしょうか。

私たちはある種の共同体的なつながりや関係の中で培ってきた[c]、とりわけ日本人的な親しさの作法をお手本にし続けています。そこには確かに、損得を超えて人を全面的に包み込むような温かみや情愛の深さを受け継いでいる面もあるかもしれません。だから無下に否定してしまうわけにはいかないという側面が確かにあります。しかし、みんな同じような職業や生活形態を前提とするムラ的な共同体の作法では、もはや親しさを維持することはできないほど、私たちの置かれている状況は以前とはすっかり変わってしまったと考えた方がいい。ムラ的な伝統的作法では、家庭や学校や職場において、さまざまに多様で異質な生活形態や価値観をもった人びとが隣り合って暮らしているいまの時代にフィットしない面が、いろいろ出てきてしまっているのです。そろそろ、⑤○○性を前提とする共同体の作法から、自覚的に脱却しなければならない時期だと思います。このことは、これを読んでくれる若い人たちにもあてはまるだろうし、何よりもいまの学校の先生や、親御さんにも、ぜひご理解をして頂きたい大事な側面だと私は考えています。

基本的な発想として、共同体的な凝集された親しさという関係から離れて、もう少し人と人との距離感を丁寧に見つめ直したり、気の合わない人とでも一緒にいる作法というものをきちんと考えたほうがよいと思うのです。人と人とのつながりについて、基本的な⑥発想の転換を試みてみようと思うのです。

出典　『友だち幻想』
　　菅野仁
　　ちくまプリマー新書

問一　二重傍線部a「媒介」b「ジュンスイ」c「培って」について、カタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二　空欄［A］～［C］に当てはまる語句の組み合わせとして適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A高い　B多い　C濃密
イ　A高い　B少ない　C濃密
ウ　A低い　B多い　C希薄
エ　A低い　B少ない　C希薄
オ　A高い　B多い　C希薄

問三　空欄［D］・［E］に当てはまる語句として適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

［D］問題　・・・　ア　進退　　イ　生活　　ウ　努力　　エ　死活
［E］とかわす　・・・　ア　のんべんだらり　　イ　のらりくらり　　ウ　のそりのそり　　エ　のべつまくなし

問四　各見出しの空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる語句を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。
ただし、Ⅰは四字、Ⅱは九字で抜き出すこと。

問五　傍線部①「ご近所の人の顔と名前はぜんぶわかる」の一文を文節に区切り、その数を算用数字で書きなさい。

問六　傍線部②「ある意味で、『人は一人では生きていけない』というこれまでの前提がもはや成立しない状況は現実には生じているといえるのです。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　近代社会になってきて、お金が生活を媒介する手段として浸透し、お金があれば何でも手に入るから。
イ　二十四時間営業の店が増え、いつでも望むものを手に入れられるようになったから。
ウ　インターネットが普及したことで、外出しなくても買い物ができるようになったから。
エ　生活に必要なものをそろえるために、近隣住民に手をかしてもらえるから。

問七　傍線部③「さびしい」の品詞名を漢字で書きなさい。

問八　傍線部④「どうしてそうなってしまうのでしょう。」とあるが、人がつながりを求める一方で、傷ついたり人を追い詰めたりする状況になってしまうのはなぜだと、筆者は考えているか。その理由として当てはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本人的な親しさの作法が現代に合わなくなったために、そこから自覚的に脱却したから。
イ　これまで受け継いできた日本人的な親しさの作法を、真正面から受け止めてしまいがちだから。
ウ　生活形態や価値観が多様化したために、かつての日本人的な親しさの作法では通用しなくなったから。
エ　いまだに「ムラ社会」の時代の日本人的な親しさの作法に、強くこだわっているから。

問九　傍線部⑤「〇〇性」に当てはまる言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　正当　　イ　異質　　ウ　同質　　エ　異常

問十　傍線部⑥「発想の転換」とあるが、その試みとして当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　友達が「良い」ということには、自分が「良くない」と思っても話を合わせる。
イ　気の合わない人と一緒にいても自分がいやな思いをするだけなので、その人を避けるようにする。
ウ　先輩が言うことは絶対なので、自分が納得できなくても、先輩の指示には必ず従う。
エ　苦手な相手とは考え方が違うので、突っ込んだ話題を避けてうまく接するようにする。

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（解答はすべて解答用紙に記入しなさい。字数制限のある場合は句読点等の記号も含む。）

尾上圭介の『大阪ことば学』に「当事者離れ」[①]という話術のことが載っている。その代表的な表現が「ヨー言ワンワ」である。例えばこんなふうに使われる。

「　　」　ア
「　　」　イ
「　　」　ウ
「　　」　エ

「よう言わんわ」

（『大阪ことば学』八六頁）

この「ヨー言ワンワ」は不可能の表現であり、「あきれて、私は何も言えないよ」というような意味であるという。「ばかやろう」とか「何冗談言ってんだ」などと［A］的な反応を返すのではなく、その場の状況のばかばかしさを、遠巻きに眺めている雰囲気が漂う[a]。このような「事件の当事者としてではなく、状況の外に立つ第三者として事態のおかしさを味わおうとする姿勢」が「当事者離れ」の手法である。

当事者離れの手法は、相手へツッコむときだけでなく、自分自身のまぬけな行為に対してもとられる。

「福知山線の××から福島まで、二枚。あさって乗りますねん」
「今日しかあきまへんで」
「ほんでも、距離によって、三日間有効とか、四日間有効とか……」
「いや、今日売ったのは今日しか乗れまへんで。大阪の福島でっしゃろ」
「いえ、福島県の福島」
「なんや、福島県の福島でっか。えらいちがいや、はっはっはっ……」

（『大阪ことば学』九四頁）

図 16　益田ミリ『大阪人の胸のうち』（光文社「知恵の森文庫」）

この場合は、自分の誤解を、［B］他人事のように笑い飛ばしている。先の例も含めて、これらはいずれも話者たちがお互いに笑い合うような場面である。さんざん冗談を言い合ったあとで、「ほんま、話やわ」（図16）などとしめくくるのも同様の手法であろう。

ただ、当事者離れの手法は、そうしたときだけでなく、人に頼み事をするような場面でも使われる。［C］、なかなか許してくれない相手に向かって「そない言わんと、まあ、堪忍したって」と頼む。あるいは、満員のバスの中で人を掻（か）き分けながら「ちょっと降ろしたって」と声をかける。このように、自分のことなのに、まるで第三者の誰かを許してやってくれ、降ろしてやってくれ、と言っているような口の利き方は、尾上によれば、「頼む自分と頼まれる相手とが百八十度向き合ってしまうのを避けたいという感覚のなせる技」なのだという。

こうした当事者離れの手法は、話す自分を本来の自分から分離させることだとも言える。つまり、図17のように、普通は本来の自分（自己）と話す自分（話し手）とは一体化している。自己である話し手が聞き手に話しかける。ところが、当事者離れでは、図18のように自己と話し手を分化させ、話し手が現場の外から聞き手に話しかけるというかっこうをとる。

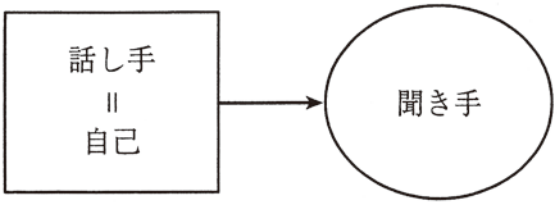

図 17　自己と話し手の一体化

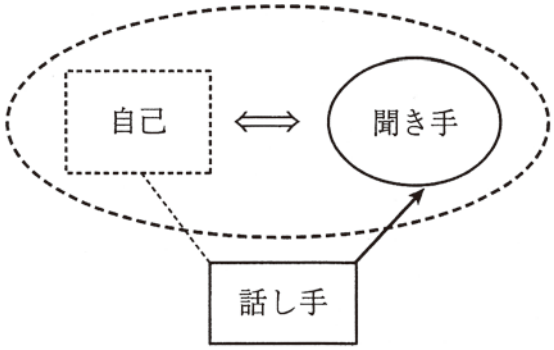

図 18　自己と話し手の分化

「X」と言う場合、自己は話し手によって外から観察される存在であり、あたかも第三者のような扱いを受けることになる。「よう言わんわ」「Y」の場合には、話し手は聞き手が属する現場を抜け出して、そこで起きている事態を外から論評する感じになる。このとき、聞き手も話し手と一緒に現場を抜け出せば、その現場を見ながら互いにあきれて笑い合うコウズ[b]になる。

自己と話し手の分化は、本来主観的な存在である自己とは別に、客観的な存在としての話し手を設ける[c]操作でもある。現場の真っただ中にいる自分から離れ、語り手としての位置から自分を含めた現場を眺める。これは、②絶対的な自己を相対化することであり、主観から客観への視点の移動でもあると言える。

主観の視点を瞬時に客観に切り替える。これはなかなか高度な手法である。③こうした手の込んだ操作を大阪人はいとも簡単に行っていることになる。一方、このような複雑なものの言い方は、他の地方の人、特に東北人は苦手なのではないかと想像する。

出典　『ものの言いかた西東』
小林隆・澤村美幸
岩波新書

問一　二重傍線部a「漂う」b「コウズ」c「設ける」について、カタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二　四角部「ア」「イ」「ウ」「エ」に入ることばを次の語群から選んで会話が成立するように記号で答えなさい。

1　「いや、ありがとう」
2　「今日、あんたに会うから、結婚祝いの置き時計かなんかくれるやろ思て、それをこのふろしきで包んで帰るねん」
3　「君、結婚したんやてなあ。おめでとう」
4　「ところで、君、ポケットに大きなふろしきを入れて、何のつもりや」

問三　空欄［A］に当てはまる語として最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　理性　　イ　自然　　ウ　人工　　エ　客観　　オ　感情

問四　空欄［B］［C］に当てはまる語句を次のア～キの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　つまり　　ウ　例えば　　エ　また　　オ　なぜなら　　カ　あたかも　　キ　確かに

問五　空欄［X］［Y］には、ア「ちょっと降ろしたって」、イ「えらいちがいや」のことばが入る。それぞれどちらを入れるのが適切か記号で答えなさい。

問六　傍線部①「当事者離れ」とは、どのようなことをいうのか、解答欄に続くように、本文中の語句十七字で抜き出して、始めと終わりの三字を書きなさい。

問七　傍線部②「絶対的な自己を相対化すること」とは、どのようなことをいうのか、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア　本来の自己と話し手を一体化させ第三者のような立場をとること。
イ　本来の自己と話し手を分化させ第三者のような立場をとること。
ウ　自己中心から他人中心にさせ当事者のような立場をとること。
エ　他人中心から自己中心にさせ当事者のような立場をとること。
オ　聞く他人と話す自分を分離させ当事者のような立場をとること。

問八　傍線部③「こうした手の込んだ操作」とは、どのようなことをいうのか、本文中の語句十三字で抜き出して、始めと終わりの二字を書きなさい。

問九　この文章は、『大阪ことば学』の紹介と、筆者の視点からの考察との二つの段落に分けることができる。二段落の最初の五字を抜き出して答えなさい。

総合

平成三十一年度　一般入学試験問題　国　語　解答用紙

科
受験番号
男・女
氏　　名
得　　点

一

問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四			問三		問二	問一		
						Ⅱ		Ⅰ	E	D		c	b	a
												って		

二

問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
	始め		始め	X	B		ア	c	b	a
							イ			
	〜		〜							
	終わり		終わり	Y	C		ウ			
							エ			
			こと。					ける		う